

博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	大 原 眞 弓
論 文 題 目	平安時代の即位儀礼と仏舎利信仰 一代一度仏舎利使をめぐる
論文審査担当者	主 査 告 井 幸 男
	審査委員 梅 田 千 尋
	審査委員 桑 山 由 文

天皇の即位儀礼は、当時の国家観・社会観を探るうえでも、あるいは思想・宗教といった面からも、非常に有益な考察対象である。大王の時代からの原初的儀礼に端を発し、律令制において法的に位置づけられつつも、平安時代以降さまざまな変容を蒙ることとなった。先行研究は、大嘗祭や神宝使などの神事を中心に膨大なものがあるが、近年では、中世に行われるようになった密教儀礼である、即位灌頂についての研究も進められている。本論文で取り上げる一代一度仏舎利使は、平安時代から鎌倉時代にかけて即位時に天皇が五畿七道の名社に仏舎利を奉獻し、永祚長久・五穀豊穡を祈願する即位儀礼である。史料の少ないこともあって、本格的な専論はほとんどない。本論文の目的は、この特異な神仏習合の即位儀礼が何時、何を目的に始められ、いかに継承され終焉に至ったかを明らかにすることである。本論文は序章と終章をのぞいて全五章からなる。

第一章「仏舎利とその信仰」では、仏舎利・塔信仰の中国・日本への伝来過程を見る。六・七世紀の塔の心礎への仏舎利奉納の時期を経て、奈良時代になると仏舎利は仏堂に移され、公開のために舎利容器が造られ、意匠を凝らしたものとなった。その後、渡海僧によって舎利が数多く日本にもたらされ、中でも鑑真と空海由来の仏舎利は最も正統な仏舎利とされた。また空海の提言で宮中真言院が造られ、東寺の仏舎利を移して後七日御修法が行われた。以上、仏舎利使の創始・展開を考える上での前提としての考察がなされている。

第二章「日本における仏舎利信仰の展開」では、舎利会が公開され、享樂的法会になり、民衆化し、平安時代後期の末法思想と浄土信仰の浸透の中で、極樂往生と易行という鎌倉仏教の特質を帯びていくという、新しい舎利信仰の姿を論じる。特に中世以降は舎利講の隆盛期となり、また新しく講式が造られ、短文の偈である舎利礼文、和文の讃嘆・和讃が盛り込まれるようになったことを示す。

第三章「一代一度仏舎利使の発遣」では、一代一度仏舎利使の沿革・発遣の特徴を中心に検討する。文献上の初例は天曆2年(948)であるが、それ以前、仁和4年(888)に宇多が始めたと推測でき、宇多を萌芽とし村上の代で制度として確立されたとする。また、主に『民経記』から発遣日程をたどり、発遣日を定める 発遣費用(用途)の算出 諸国へ用途の件を知らせかつ鎌倉幕府への成功を依頼する 担当者の人選と日時定めの日を決める 行事所を置く 定(評定)で陰陽寮の日時勘文に従い、発遣日と仏舎利使受戒の日時を確定 行事所始め(吉書加判と

壺作りの儀) 関係諸国へ蔵人所牒に關白(九条道家)の御教書を添えて下知 仏舎利使受戒
天皇の仏舎利御覽を経て発遣、となることを明らかにした。他にも、仏舎利使の戒名(僧名)
の頭文字に発遣先の神名の一字を組み込むという、諸社片字に関する事実の指摘、史料の発見など、
仏舎利使についての基礎的新事実に多く触れられている。

第四章「即位儀礼の変化と一代一度仏舎利使」は、主要な即位儀礼の特色・変容を把握し、その
中で一代一度仏舎利使の創始・展開を見る。比較対象は、 必須の即位儀礼としての踐祚・即位礼・
大嘗祭、 陰陽道的即位儀礼としての八十島祭と羅城祭、 仏事の即位儀礼として一代一度仁王会、
神事の即位儀礼として一代一度大神宝使、 神仏習合の即位儀礼として一代一度仏舎利使、
である。宇多の大神宝使発遣の時は、仏舎利奉獻も同時に行われたと推定され、大神宝使と仏舎利
使が分割されたのは村上の時であったとする。諸儀礼の沿革を考察した上で、天皇と神の直接的な
つながりを強化するために大神宝使と仏舎利信仰を取り入れた仏舎利使が成立したと結論づける。

第五章「一代一度仏舎利使の成立と終焉」では、一代一度仏舎利使の成立と終焉の様相を歴史的
に位置づける。すなわち宇多即位時から旧来の即位儀礼に加え一代一度と呼ばれる即位儀礼(仁王
会・大神宝使・仏舎利使)が企画され、天皇即位を支える新しい儀式と意義付けられたことを、宇
多の即位事情から論じる。また、文徳の頃から神の世界では二十二社・一宮制など神階制が整えら
れ、仏の世界では神との融合を求めて神仏習合の現象が神宮寺・神前読経など多方面に広がり、仏
舎利信仰が高まったとする。一代一度仏舎利使は即位儀礼として一見特異だが、神仏習合・仏舎利
信仰が浸透していく時代に不可欠の新しい即位儀礼として位置づけられるとする。

終章では全体の内容を総括し、今後の課題として、仏舎利信仰と極楽往生の事例研究、諸社片字
と神階制の関係、宇多の宗教観、聖遺物としての仏舎利の性格、などをあげる。

以上、本論文は即位儀礼を構成する一つでありながら、これまであまり顧みられることのなかつ
た、一代一度仏舎利使についての初の本格的な研究であり、創始の事情や、発遣儀礼の詳細につい
て多くの事実を明らかにした、天皇即位儀礼の分野において意義ある研究と認められる。

しかしながらその反面で本論文全体を貫く課題の設定と論理的な考察、歴史研究の根幹である史
料批判と実証的な手法における史実の提示という側面において、いくつか検討を要する事例があつ
たことも指摘しておかねばならない。

その一つは、本論文が「即位儀礼」「仏舎利信仰」をテーマに掲げながらも、ほぼ議論が「一代
一度仏舎利使」に留まってしまっている点である。第一・二章で仏舎利信仰について、第四章で即
位儀礼の叙述がなされているが、先行研究の祖述、史料の提示に終わっている場合が多い。また、全
体にわたって、丁寧な論証を示すことなく、自らが抱く神仏習合・浄土信仰の様相へと帰結させて
しまう論法がしばしば見られる。浄土信仰や中世仏教(近年、鎌倉仏教という語は避けられる)に
ついての研究史把握が薄いこともそれと関連していよう。

二つ目は、史料の引用・解釈において多くの誤記や誤読があることである。この点も上記のこと
と関連しており、自らの仏教史像や歴史像・歴史知識に合う史料の抜粋・読解をするという傾向に
あるため、史料本来の文脈を読み誤り、短絡的な評価を下しがちである。本論文が公表され、多
方面からの批評や批判を受けることで、自覚的に修正されることを期待したい。

以上のことをふまえ、審査委員一同は、本論文が博士(文学)の学位を授与するに適格であると
判断する。